

記念寄稿

YMJ 30 年間のおもいで

藤井 秀樹

山梨大学理事・副学長, 附属病院長

YMJ が発刊されて 30 年が経過したことを、多くの方が感慨深く思われておられるのではないのでしょうか。もちろん私もその一人です。

私は山梨医科大学附属病院が開院した昭和 58 年の 12 月に山梨にまいりました。それから 2 年を経た昭和 61 年 1 月 1 日に「山梨医大誌」として YMJ 第 1 巻 1 号が発刊されました。その年の春に山梨医科大学の一期生が卒業した年です。教員の数も少なく、したがって山梨大学医学会の会員も多くなく、発行部数は本当にわずかだったと記憶しています。当初の編集委員長は入来正躬先生、山梨大学医学会会長は高安久雄学長と記憶しています。お二人とも今は亡きお方です。YMJ はその後平成 14 年 10 月の山梨医科大学と山梨大学との統合により、平成 15 年からは「山梨医大誌」から「山梨医科学誌」に名称変更になりました。私は平成 16 年に大野伸一先生が編集委員長をされておられたときから編集委員として編集委員会に加わり 13 年間を経て今に至っています。私の YMJ への愛着心は編集委員を任せられるようになって育ったと思います。そういう意味では編集委員の任期をきちんと規定し、可能な限り多くの方に編集委員を経験していただくのが良いと思います。私自身、「Variations of the union between the terminal bile duct and the pancreatic duct in patients with pancreaticobiliary maljunction」という論文を第 18 巻に投稿しています。また森石恒司編集委員長の時に YMJ がオンライン化されたことは、このレベルの学術雑誌では画期的なこ

とだと思えます。森石先生のご努力に敬意を表したいと思います。

さて、山梨医科学誌ならびに山梨大学医学会に心より感謝していることがあります。2009 年、米国留学中に重篤な疾患であることが判明し、帰国を指示し、新型インフルエンザの流行でパニック状態に陥っている成田空港に迎えに行き、大阪空港を経て手配しておいた岡山の病院に入院してもらった教室員がいました。彼は死期を悟っており、留学中にまとめた論文を雑誌に掲載された形で生きている間に見たいとの強い希望を私に伝えて来ました。論文のレベルはかなり高いと判断しましたが、私は YMJ に投稿するのが彼の思いを全うする最良の方策と考え、当時の編集委員長でいらっしゃった北村正敬先生に、最新号の編集は終了していただきましたが掲載をお願いしご理解いただき、さらに査読をしていただいた範江林先生には短時間で査読していただきすばらしい評価をしていただきました。岡山の病院に発刊されたばかりの山梨医科学誌を持ってゆくと、彼は奥様と一緒に満面の笑みを浮かべて喜んでくれました。そこに涙はありませんでした。その論文は「Deficiency of macrophage colony-stimulating factor attenuates DSS-induced colitis in mice」という英語論文で山梨医科学誌第 24 巻に掲載されました。この機会に北村先生、範先生に改めて感謝申し上げます。そして彼は亡くなりました。告別式の際に私自ら棺に山梨医科学誌第 24 巻を供えました。その後、山梨大学医学会で彼の業績を高く評価していただき、「山梨県

医師会優秀賞」を受賞させていただきました。私が代理で受賞し講演をさせていただきました。この時の山梨大学医学会会長は有田順先生でした。ありがとうございます。その後、表彰状等ご家族に持参しましたが、ご両親、お兄様は大変お喜びになり感謝されていました。私が仏前にて報告させていただきました。山梨大学医学会に改めてお礼申し上げます。本当にありがとうございました。

また、さらに教室の岡本廣拳がやはり山梨医科学誌第27巻に「Sphingosine1-phosphate stimulates cell migration and active seprase expression in human endothelial cells」という論文を投稿し、「平成24年度山梨県医師会優秀賞」を受賞させていただきました。この時も岡本君がフランスへの学会出張ということで都合がつかず、私が代理で受賞し、また受賞講演

もさせていただきました。悲しい背景での受賞、また、嬉しい背景での受賞ともに私が代理を務めましたことに非常に不思議な感覚を覚えたことを記憶しています。

YMJが、入来正躬先生、佐藤章夫先生、劔邦夫先生、大野伸一先生、加藤良平先生、荒木力先生、北村正敬先生、山縣然太郎先生、久保田健男先生、森石恒司先生、杉田完爾先生の11名の山梨医大誌ならびに山梨医科学誌編集委員長のご尽力で、非常に充実した質の高い学術雑誌に成長したことを実感しています。

YMJとともに歩んだ30年のなかでの思い出を述べさせていただき、YMJがこれからも多くの先生方のご尽力のもとさらに充実した学術雑誌になることを心より祈念しつつ稿を閉じたいと思います。